

保育者養成におけるピアノ指導の現状と課題 - - 養成校へのアンケート調査を通して - -

宮 脇 長谷子

The presento situation and a problem of a piano helm in nursing person trainig
----Through a questionnaire survey to nursing person training school---

Haseko Miyawaki

1 研究の目的

筆者は、保育者養成におけるピアノ指導が保育現場においてより有効に生かされるためにはどのような教材や授業内容が望ましいかについて、十数年間継続して研究を行ってきた。と言うのも、従来日本の養成校では、音楽を専門に勉強するために組み立てられたプログラムが保育者養成のピアノ指導にもそのまま低レベルにして用いられ(1人当たり 15 分程度のレッスン時間では内容的に不十分にならざるを得ない)、保育者養成という本来の目的に適った独自の工夫がなされない傾向にあったからである。とりわけ、「バイエルピアノ教則本」をスタートとして、ツェルニー・ソナチネ・ソナタといった教材が最も多く用いられていた。保育者にとって必要とされる音楽的能力とは、古典的なドイツの教材が正確に弾けることではなく(指が回る事でもない)、幼児一人一人を見守りながら弾き歌いをし、幼児の音域に合わせて時には移調ができて、更に身体表現においては、その動きに合わせて即興的に演奏ができるといったものである。そのような能力を育成するためにはコードの学習こそが第一になされるべきであり、幼児の好む歌唱教材のもつ音楽的な特徴(運指・コード・リズム)と共通点が少ないこと、限られたレッスン時間でマスターするには無駄が多すぎる事等から「バイエル」が不適切な教材であることを学会発表等で指摘し続けてきた(注1)。

しかし、保育者になるには「バイエル」が弾ければ十分とする常識は根強く、1976年の調査では実に養成校の93%が「バイエル」を使用している(注2)。また、厚生労働省が課している「保育士試験」の「音楽」の課題を調査してみたところ、ピアノの課題は1990年では1県、2000年では2県を除いて全ての都道府県が「バイエル」から出題しており、10年前とあまり変化していないことが分かった。このような保育士試験の実状が、養成校のカリキュラムへの足枷になっていると言われているが、厚生労働省通知「保育士試験の実施について」の「2. 問題作成及び採点上の留意事項」には、「保育士養成施設のカリキュラムと均衡を図るよう配慮すること」とあり、逆に養成校側のカリキュラムが変われば試験課題も変化するのではないかと提言してきた(注3)。

では、養成校のピアノ指導はどう変わったのか。それを知るために今回は新たに養成校へのアンケート調査を行い、その分析と一部先行調査との比較からピアノ指導の実態と内容を探ることとした。更に、本学の現状と比較し今後の課題の発見に役立てたいと考える。

2 調査方法及び内容

2 - 1 調査方法

「保育者養成校（大学）のピアノ指導の内容について」と題したアンケート用紙を作成し、郵送により回答を依頼した。依頼先は、「幼稚園教諭免許または保育士資格が取得できる大学及び短期大学」とした。概略は以下の通りである。

2000年11月28日 306通発送

4年制大学 国立（34校） 公立（5校） 私立（51校）

短期大学 公立（12校） 私立（204校）

原則は無記名としたが、集計結果の公表を希望する場合は学校名と担当者名の記入をすよう求めた。

2 - 2 調査の内容

アンケートは自由記述も含めて17の質問項目により構成されているが、その内容は以下のように分類することができる。

（1）ピアノ指導の実態を探るもの

学生数、取得免許・資格の種類とその取り方（卒業要件・必修か選択か）、ピアノ指導が行われる授業の科目名とその開講期間・単位数（必修か選択か）、授業を行うレッスン室の状況（個数・広さ）、学生が使える練習室の状況（個数・解放時間）。

（2）ピアノ指導の内容を問うもの

入学時の学生の演奏能力、授業の形態、レッスン時間、授業内で取り上げている活動・教材、他の音楽科目との連携。

（3）ピアノ指導上の工夫・課題を問うもの

教材選択や課題の与え方、指導上困難な点や悩み等については、自由記述で記入を求めた。

3 結果と考察

3 - 1 アンケートの回収

2000年12月末日までに返送された123通を分析の対象とした。回収率は40%であった。

3 - 2 ピアノ指導の実態について

（1）回答校の内訳と幼児教育専攻の学生数については以下の表を参照されたい。

幼児教育専攻の在籍学生数について

回答校内訳

	校数
4年制	27
短期	89
併設	7
専攻科	6
短専攻科	3
大学院	12
二部	3

幼児教育専攻学生数

	校数	平均	最小値	最大値	標準偏差
1年	30	71.0	5	218	66.8
2年	30	61.4	0	219	60.5
3年	31	68.9	5	260	68.0
4年	30	69.4	0	253	68.0
短期1	96	135.4	0	402	73.8
短期2	94	129.6	30	397	65.0

1校あたりの合計学生数

	校数	平均	最小値	最大値	標準偏差
合計	119	272.2	33	1320	202.1

学

生数について目立った特徴は、4年制大学よりも短期大学の方がほぼ倍近く多いということである。保育者の質を向上させるためには4年間の教育が必要だと言われながら、

短大教育へのニーズは変わっていないという現状が見えてくる結果となった。

(2) 取得できる免許・資格については表1の通りである。

4年制大学の中には短期大学を併設している学校を含むため、最大回答数が29となっている。

表1 取得が可能な免許・資格

	4年制大学			短期大学		
	回答校数	卒業要件	取得可	回答校数	卒業要件	取得可
小学校教諭1種	20	4	16	0	0	0
小学校教諭2種	5	4	1	19	3	16
幼稚園教諭1種	29	14	15	2	2	0
幼稚園教諭2種	1	0	1	87	27	60
保育士資格	15	2	13	75	14	61

4年制大学では幼稚園教諭1種、小学校教諭1種の資格の他に保育士資格も取れるようになった点が以前と変わった点といえる。保育士資格を取得できる大学は約半数にあたる15校であった。短期大学でも幼稚園教諭2種免許と保育士資格を同時取得できる学校が増えており、69校(72%)が該当している。幼保一元化が提唱されて既に久しく、両資格を持っていないと就職試験も受けさせないという市町村も増えてきており、本校のように保育士資格のみの短大は社会の動向から取り残されるのではないかと感じている。

その他の取得可能な資格については以下に示す。()内の数字は回答校数

社会福祉主事任用資格(7) レクリエーション・インストラクター(7)

児童厚生2級指導員(2) 図書館司書(2)

キャンプ指導員 情報処理士 ビジネス実務士 ホーム・ヘルパー2級(各1)

(3) ピアノ指導を行う授業の科目名と開講期間・単位数について

カリキュラムの改訂・免許法の改定等により、以前のようにピアノの指導のみの独立した時間を設定できなくなって久しいが、養成校において鍵盤楽器の演習が皆無になるとは考えにくく、MLによる集団レッスン等も含めて様々な工夫と改革がなされているものと思われる。本校では「音楽・」という科目名で、声楽の集団レッスンとピアノの個人レッスンを組み合わせて行っている。他の大学の実態はどうであろうか。1972年に行われた中目徹氏の調査結果(注4)と比較しながら、科目名や開講時期・単位数について分析してみたい。

1972年、大学38校・短大166校に対して行われた調査では、ピアノ指導は「器楽」という科目名で、他の「声楽」・「音楽理論」・「音楽リズム」とは別に独立したものとして扱われている。今回の調査では、本校と同じ「音楽・」という科目名が最も多く47校(38%)が該当している。しかし、「器楽」という科目名もまた多く「器楽・」「器楽A・B」「器楽演習」と言った様々な呼び方をまとめると48校が該当し、「音楽(器楽)」という名称群を含めると60校(48%)となる。「ピアノ・」「ピアノ演習法」「ピアノ実技」等、「ピアノ」という名称を直接用いている学校も45校みられた。勿論、科目名だけで授業内容まで推し量ることはできまいが、養成校におけるピアノ指導に関する意識はあまり変わっていないように思う。つまり、依然としてピアノ指導を独立したものとして重視している視点を感じ取れるのである。それに対し、「音楽表現の指導法」とか「幼児音楽伴奏法」「音楽表現法」といった総合的な指導内容を思わせる科目名も25校でみられた。また、自由記述の中で「ピアノだけの時間はなくなったのに、質問がナンセンスだ」との批判がなされていたが(1校)、筆者の意図するところは「ピアノの

時間復活」への願望ではなく、音楽教育の一端を担うピアノ指導の在り方を模索するものであった。

このような批判はあっても、ピアノ指導が全くなされていない学校は皆無であり、それがなされている科目の開設期間と単位数は、科目名同様に 1972 年の調査と変化がなく、必修・選択ともに、2 単位・通年が最も多かった（表 2 参照）。本校でも 1 年次は必修（音楽）で通年・2 単位、2 年次は選択（音楽）で通年・2 単位としている。

表2 ピアノ指導の開設期間と単位数について
(ただし、半年を1学期とする)

必修科目として

	1学期	2学期	3学期	4学期	合計
4年制	10	3	0	1	14
短期	6	45	1	8	60
併設	1	1	0	0	2
合計	17	49	1	9	76

必修科目として

	1単位	2単位	3単位	4単位	合計
4年制	1	12	1	0	14
短期	17	40	0	4	61
併設	0	2	0	0	2
合計	18	54	1	4	77

選択科目として

	1学期	2学期	3学期	4学期	合計
4年制	5	5	0	3	13
短期	8	38	5	15	66
併設	2	1	0	1	4
合計	15	44	5	19	83

選択科目として

	1単位	2単位	3単位	4単位	6単位	8単位	14単位	合計
4年制	0	8	0	3	0	1	1	13
短期	17	31	4	11	2	0	0	65
併設	0	3	0	1	0	0	0	4
合計	17	42	4	15	2	1	1	82

(4) ピアノ指導が行われる環境について(表3参照)

授業を行う専用のレッスン室があるかどうかを調べたところ、大学では 16 校・短大では 60 校が所有しており、学生用の練習室を代用しているというそれぞれ 6 校・27 校を上回っている。しかし、部屋数が十分に確保されているわけではなく、平均は 1 校当たりそれぞれ 4.9 室・7.1 室と学生数に比して少ない。また、グループレッスンが可能な部屋の所有は、大学で 6 校・短大で 22 校と少なく、ピアノ＝個人レッスンという形態は不変のようである。逆に言えば、集団レッスンをしたくてもできないということにもなるのである。本校の現実をいえば、ピアノ指導は学生用の狭い練習室で行われ、授業専用の部屋がないという状況である。その部屋も大変狭く（5 平米・4 室、4 平米 16 室）、講師 1 人と学生 1 人か 2 人しか座れない部屋で授業をしなければならない。したがって

まとまったグループレッスンが出来ないために、教育効果が上がりず困っている状況である。他校の個人用練習室の平均 11.6 平米に比べても狭いことが分かる。

次に学生の練習環境であるが、練習室 1 部屋につき平均 10.4 人が使用するという結果が出ており、決して恵まれているとは言えないようである。また、1 校当たりの平均部屋数は短大で 24.2 室となっているが、本校は 20 室しかなく不足を感じている。

最後に殆どの養成校は、平均して 8 時から 19 時まで無料で練習室を開放している。有料の学校は 11 校であった。

表3 ピアノ指導が行われる環境(小数点の数字は平均値)

		4年制大学	短期大学	併設校
授業専用の教室	ある	16校	60校	3校
	部屋数	4.9室	7.1室	4.7室
	広さ	39.8平米	29.7平米	5.5平米
個人用練習室代用	する	6校	27校	2校
	部屋数	27.3室	13.4室	9.5室
	広さ	10.6平米	9.2平米	15平米
教員研究室代用	する	7校	18校	2校
	部屋数	2.4室	2.6室	5.1室
	広さ	38.2平米	28.0平米	20.5平米
グループレッスンが可能な教室	ある	6校	22校	1校
	広さ	102.8平米	90.9平米	150.0平米
学生用ピアノ練習室	ある	24校	87校	7校
	部屋数	23.8室	24.2室	31.9室
電子ピアノの設置	ある	8校	31校	3校
	部屋数	1.1室	3.1室	1.7室
	台数	20.0台	20.3台	45.3台
電子オルガンの設置	ある	7校	20校	3校
	部屋数	1.5室	3.5室	2.0室
	台数	8.0台	9.9台	4.3台
合計部屋数		599室	2326室	236室
1校当たりの平均部屋数	回答校数	26校	88校	7校
	部屋数	23.0室	26.4室	33.7室
学生総数		5952人	23506人	2939人
1室当たりの学生数		9.9人	10.1人	12.5人

3 - 3 ピアノ指導の内容について

(1) 学生の入学時の演奏能力とレッスン時間について (表4・表5参照)

学生の入学前のピアノ学習歴を問うたところ、初心者は平均 34.7 %、5 年未満の経験者は 40.5 %、5 年以上の経験者は 25.2 %であった。また、入学試験にピアノの実技を課している学校は、大学で 1 校・短大で 8 校のみであり、初心者の入学率は今後も大きく変化しないものと思われる。本校も同様に入学時の試験は行っていないが、他校の平均に比べ初心者の比率が高く、12 年度は 45.5 %、13 年度は 49.7 %であった。初心者に対して丁寧な導入と指導が必要なのは当然のことであるが、与えられたレッスン時間は短く、流れ作業のように学生が入れ替わりしているという状況である。他校のピアノ指導の時間と講師 1 人当たりの担当学生数の平均は 90 分で 6.5 人であるが(必修の場合)、本校は 90 分で 12 年度は 7.5 人、13 年度は 7 人であった。学生 1 人当たりのレッスン時間は、他校平均で 13.8 分、本校は 13 年度で 12.9 分となる。ただし、他校が選択となる

と学生数が増えるのに対し（平均 6.8 人）、本校の場合は 4 人前後と恵まれている。学生 1 人当たり 20 分のレッスン時間は是非確保したいところであるが、他校も含め現実には厳しいようである。

表4 学生のピアノ学習歴（小数点の数字は平均値・%）

	回答校数	初心者	5年未満	5年以上
4年制	25	37.6	35.6	26.9
短大	84	31.8	45.3	23.5
併設	5	36.2	41.0	26.6

表5 授業時間と講師1人当たりの担当学生数（小数点の数字は平均値）

	回答校数	必修時間	必修学生数	選択時間	選択学生数
4年制	7	90.0	6.7	88.8	7.2
短大	51	84.3	6.4	86.3	6.5
併設	2	90.0	6.5	112.5	6.8

（2）レッスン形態、指導内容について

前節で述べたような状況においては、短時間で指導効果を上げられる教材選びとレッスン形態が求められる。そこで、まずレッスン形態についてまとめたものが表6である。

既に述べたように「主に個人レッスン」と答えた学校が多く、大学で 17 校（約 63 %）、短大では 79 校（89 %）が該当している。「主にグループレッスン」と答えた学校はそれぞれ 5 校（19 %）と 20 校（22 %）であった。電子楽器の開発・普及により「ML による集団レッスン」が脚光を浴びていたが、思っていたよりも回答校が少なく、短大では 14 校（16 %）である。ML の設備には費用がかかるために普及しないのであろうか。筆者自身は「ML による集団レッスン」と「ピアノの個人レッスン」の併用が望ましいと考えており、本校開校のおりには ML の設備を希望したのであるが叶えられなかったのである。この 2 つを併用している学校も少数ながら存在しており（大学 3 校・短大 10 校）、本学にとっては課題の一つといえよう。

表6 ピアノ指導の形態について(複数回答可)

	主に個人レッスンの形式	主にグループレッスン	アンサンブルを取り入れている	MLによる集団レッスン
4年制	17	5	4	6
短期	79	20	14	14
併設	7	2	0	2
合計	103	27	18	22

しかし、問題とすべきは設備の面からの制約ではなく、積極的に「ピアノ＝個人レッスン」を良しと考えている指導者も多いということである。「ML の設備は揃っているがピアノのタッチと違うし、使いこなせないから放置している学校がある」と聞いて驚いたが、このように極端ではなくとも、「ピアノの音は捨てるのが難しい」とか、「個人レッスンが常識」といった指導者の言葉は良く耳にしている。確かに十分なレッスン時間とレッスン室の環境が整っていれば「個人レッスン」に何の異議も唱えないところであるが、既に述べてきたような状況ではただ「何曲弾かせたか」、「何曲弾いたか」といった程度の達成感にすぎない。ピアノ独自の美しい音が出せることより以前に保育者養成に必要なことは、既に述べたように、歌の伴奏能力や即興的な演奏能力の育成である。そこで本校では、ピアノ指導の中で「鍵盤和声やコード奏」、「移調奏」、「伴奏法」、「簡易伴奏」、「アンサ

ンプル」等を取り入れているが、他校の授業内容を問うたところ、表7のような結果となった。

表7 ピアノ指導の授業科目において取り入れている活動

	鍵盤和声 やコード奏	移調奏	伴奏法	初見視奏	簡易伴奏や 即興伴奏
4年制	15	9	18	7	19
短期	52	31	60	26	60
併設	4	2	4	1	3
合計	71	42	82	34	82

「伴奏法」「簡易伴奏や即興伴奏」に関しては大学・短大ともに70%近くの学校が選択しており、1972年当時とは大きく変わった点である。しかし、これらの授業内容は集団またはグループレッスンの方が効果を上げるものではないかと考えており、個人レッスンの形態が相変わらず多いことに疑問を抱く。やはり本校同様、レッスン室とか設備・予算の問題が障害となっているのであろうか。また、「ピアノ指導以外の音楽系の授業で、ピアノ指導をサポートする指導内容」を問うたところ、「基礎的な楽典」が多く、大学で23校(85%)短大は83校(93%)の回答があった。1972年の頃は「音楽理論」という科目が確保できたのだが現在はなく、それぞれの養成校はその内容をどの科目で補うか苦労しているようである。本校でも「保育内容(表現)」で「基礎的な楽典」を取り上げてピアノ指導のサポートをしている。(表8参照)

表8 ピアノ指導以外の音楽系の授業で、ピアノ指導をサポートする指導内容

	基礎的な楽典	電子楽器の 自動伴奏	コードバス付きア コーディオン
4年制	23	3	0
短期	83	12	7
併設	4	1	1
合計	110	16	8

(3) 教材について

今回の調査で関心の高かった教材について、実際に使用している教材名を記入していただいたところ、1番多かったのはやはり「バイエル」であり、全体で61校・54%であった。以前に比べれば減少しているが、様々な新しい教材がたくさん出版されている現代社会にあって、5割を越える使用率は驚異的と言えよう。また、「バイエル」の使用よりも問題だと感じたのは、「ブルグミュラー」「ソナチネ」「ソナタ」という古典的な教材の使用が目立ったことであり、それぞれ56校・52校・40校が選んでいる。さらに、技術訓練以外には目的が考えられないハノン、ツェルニー集(25・100・110・30・40・50番集)を用いている学校もあった(それぞれ3校と合計46校)。さらに、学習期間の短い短大で、「クラマー」や「ショパンのエチュード」を弾かせている学校もあり驚かされた。先に述べたようなレッスン時間でどのような指導が可能なのであろうか。他にも「バッハの平均律」「リスト」といった音楽大学の教材かと思わせるような記入があった。

しかし、これらの教材を全く使用しない学校も42校・37%あり、両グループの意識には大きな違いがみられる。「バイエル」を使用しないグループも、教材選択の傾向を分析すると2つのタイプに分けることができる。1つは「こどものうた200」「幼・保でおぼえる歌ベスト100曲集」「マーチ集」といった記入にみられるような直接現場で弾くも

のに取り組むタイプであり、もう一方は「幼児の音楽教育」「音楽科教育法」「実用鍵盤和声」「ピアノ伴奏法」等の記入にみられるような基礎を重視するタイプである。前者は49校（複数回答）、後者は19校であった。本校で使用しているテキスト「歌唱教材伴奏法」は後者のタイプであり、本校を含め2校の使用が確認された。

最後に両グループの違いを探る目的から、「バイエル」を使用している学校群と使用していない学校群に分けて、それぞれのレッスン形態や指導内容を比較してみたい。その結果をまとめたのが、表9と表10である。前者は主に個人レッスンで、後者は個人レッスンも多いが前者よりもグループ・アンサンブル・MLで数値が高く、授業内容も全ての項目において取り入れる率が上回っていることが分かる。

表9 ピアノ指導の形態について

	個人	グループ	アンサンブル(連弾)	ML・集団
バイエル使用校61	54 88.5%	9 14.8%	8 13.1%	11 18.0%
バイエル不使用校52	43 82.7%	16 30.8%	9 17.3%	11 21.2%

複数回答

表10 ピアノ指導の授業科目におけるピアノ以外の指導内容

	和声・コード奏	移調奏	伴奏法	初見奏	簡易・即興伴奏
バイエル使用校61	28 45.9%	16 26.2%	42 68.9%	12 19.7%	38 62.3%
バイエル不使用校52	38 73.1%	24 46.2%	37 71.2%	21 40.4%	40 76.9%

(4) 自由記述にみられる「ピアノ指導上の工夫」と「課題」について

指導上の工夫

自由記述で指導上の工夫を問うたところ、概ね以下のような記述が見られた。

- ・集団レッスンと個人レッスンを組み合わせてる。
- ・能力別の組分け、レベルごとのグループレッスン、グレード制の導入、学生の能力に合わせた選曲と指導をする。
- ・基礎的な練習曲と幼児の歌唱教材の弾き歌いを平行して学習させる。
- ・レッスンカードにより学習状況を記録する。
- ・連弾により学生同士高め合うようにする、ゼミ形式で行う、自分でカリキュラムをたてさせる。
- ・大学院生をティーチングアシスタントとしている。
- ・夏期休暇、冬期休暇を利用して課題を出す。
- ・練習状況を録音し、自分でチェックさせて提出させる。

本校でも、レッスンカードや連弾、基本となる教材と弾き歌いの2重課題、伴奏付け課題、休暇中の課題、学生の興味やレベルに合わせた自由課題の選曲等の工夫をしているが、他の面でさらに参考にしたいと考える。例えば、能力別の組み合わせ、特に初心者だけのクラス分けは効果的ではなかろうか。

課題

「困難や指導上の悩み」と言う問い方で課題を探ってみたところ、様々な悩みが寄せられた。最も多い悩みは「個人レッスンの時間が短い」というものであったが、その他の悩みの中に、それぞれの指導者の保育者養成に対する意識の違いを垣間見ることができた。つまり、保育者養成におけるピアノ指導の目的観の違いであり、技術指導という視

点から脱皮できない指導者と、それに対して批判的な指導者に分かれていると判断した。以下その概略を示したい。

<技術指導重視派>

- イ 就職試験の対応で手一杯で、基礎を教える時間がない。
- ロ 保育者としてのレポート作りと指導内容、方法に時間をかける必要が増え、ピアノの基礎指導のための時間が足りない。
- ハ 初心者にと時間をとられ、上級者に手薄になってしまう。
- ニ 初心者が増え、どこまで学生の能力を受け入れたら良いのか疑問。
- ホ 学生が練習しなくなったので、「音楽＝ピアノ」という養成教育は限界か。
- ヘ 技術の育成と就職試験の教材をどのように一致させるか。
- ト 初心者はバイエルで手一杯で現場に必要な伴奏の指導までいかない。
- チ 初心者でも1年間でバイエルからソナチネまで弾けるようにしているが、年々難しくなってきた。

<技術指導批判派>

- a 技術指導という壁が子どもの世界にまで影響を与えている。長い間養成校のピアノ指導は間違っただま変わらない。
- b バイエル、ソナチネといった教材と教育現場で要求される「子どもの歌」とのギャップは甚だしい。でも指導者側に子どもの歌を教えることへの強い抵抗がある。教える側が現場を知らなさすぎる。
- c 学生は「音楽」する楽しさまで味わえず、訓練に苦痛を感じている
- d 採用試験のバイエルがネックになっている。何故バイエルをしなくてはならないのか疑問。
- e ピアノで現場への対応を考慮しても、声楽の時間にイタリア・ドイツリート、オペラのアリアを学習させたりして困る。
- f 保育者養成に適したテキストが欲しい。教材選びに苦労している。
- g 養成校におけるピアノ指導にはどの程度時間を割くべきか、あるいはどの様な教材を中心にどの程度まで指導すべきか、根本的に悩む

<その他、共通する悩み>

- h 個人レッスンの時間が短すぎて思うように指導が出来ない。
- i 学生の意欲の低下、練習不足が目につく。
- j 学生の意欲、能力に差がありすぎる。
- k 指導者によって指導方針、評価に違いがある。非常勤講師の統一が難しい。
- l 学生のレベルが低下している。高校の音楽の授業に疑問あり（選択してこなかった学生は確かに増えている）。
- m 学生の選択が減り、就職試験で苦慮している。

以上、様々に記入された悩みをある程度分類しまとめてみたが、筆者自身は「技術指導批判派」の意見に共感を覚える立場を自覚している。「特定の教本を特定の技術レベルで弾かせなくてはならない」と考えるから、上記の八とか二と言った不満が出てくるのではないか。筆者は初心者にも上級者にもそれぞれの能力に合わせて選曲し、その完成度をもって評価しているので、初心者に対して負担感を持っていない。また、ロ・ヘ・トについてであるが、保育者にとってのピアノの基礎能力とは、現場に必要な伴奏能力ではないかと考えるが、「バイエルで手一杯」とか「レポート作りのためにピアノの基礎指導の時間が足りない」という発想は完全に逆転しているのではなからうか。ホについても、「学生が練習しなくなったから」ではなく、根本的に「音楽＝ピアノ」とい

う養成教育の限界・問題点を知るべきではないか。

それに対して、a. b. c. e. 等の意見については大いに共感できるし、g の視点から本研究を行っているのである。また f. の保育者養成に適したテキストについては、既に編集の準備をしており、筆者のライフワークの一つでもある。

最後にイ、へ、b、に見られる就職試験の縛りについてであるが、本校が使用している「歌唱教材伴奏法」という教材にはバイエルも含まれており（その編曲も含めると約4割）、就職試験に必要な場合は活用すれば良いのであって、そのためにバイエルをしているという意識もない。筆者は、バイエルについては伴奏能力の育成に役立つところを特に引き出してレッスンしているつもりであるし、あまり意味のない曲はカットしている。しかし、1にも見られるように非常勤講師の中には「バイエル」だけ取り出してレッスンしている人もおり、筆者が保育内容の時間でコードの学習、伴奏付け課題を補っている状態である。レッスン時間が短いので気の毒な面もあるが、十分な討議が必要だと感じている。しかし、「歌唱教材伴奏法」、弾き歌い、音階とカデンツ以外は全く自由教材にしているので講師各自が色々工夫を凝らして選曲し指導に当たっていただき、試験曲・課題曲が決められている他校から新しく赴任した非常勤講師のある方は「音楽性を養うにはこの方が善いですね」と評価されていた。

4 まとめ

今回の調査では回答校の殆どが大学名と担当者名を書いて下さり（80%弱）、単純集計については13年3月末にお送りしたが、この問題に対して関心を示していただいたことに、ここで感謝申しあげるとともに、一方的な批判を加えたり分析をしていることをお詫びしたいと思う。実際に「学校によって違って当たり前なのに、この様な質問には抵抗を感じる」とか「本調査はピアノが教育内容の一つであるという前提をどう捉え、どのような視点から意見しようとしているのか全く不明である。扱い方によっては、極めて基本的な部分で意を異にしているにもかかわらず、集計が一人歩きをする危険性がある」といった批判も頂いた。質問項目の立て方等には反省すべき点多々あるが、質問の段階でこちらの意見が見えてしまわないよう配慮したつもりである。その結果、養成校はかなり変化してきているとも言えるし、少なくとも「変わろうとしている」と言えるのではないかと感じた。その一方で上記チのように「初心者でも一年間でバイエルからソナチネまで弾かせるようにしている」とか「初心者にもツェルニー40番を使って基礎テクニックと読譜力をつけるようにしている」と言った旧態然としたコメントを書いている学校もあって、もっと変わらなければならないと強く考えている。

これを機会に養成機関の情報交換や交流が促進されることが望まれるが、「声楽のアンケート調査もして欲しい」とか、「現場がどれくらいピアノを必要としているのか知りたい」、「就職とピアノ試験の実態を知りたい」、「幼児教育におけるバイエルの意義について、教師がどう考えているか調査して欲しい」といった要望も寄せられ、今後の課題をいただいた。

なお本校は平成13年5月、日本保育学会第54会研究大会にて口頭発表した際の際の原稿を、大幅に修正・加筆したものである。アンケート用紙の作成、郵送、集計結果の返送に協力いただいた、東京学芸大学・井口太氏、聖学院大学・笠井かほる氏に感謝の意を表したい。

(注)

- 1 日本保育学会第48回研究大会論文集から54回大会研究論文集まで継続投稿
- 2 1977年 共同研究者・笠井氏による。同氏の東京学芸大学修士論文「ピアノ学習におけるピアノ教材についての一考察」に収録
- 3 日本保育学会第53回研究大会論文集 pp404 ~ 405
- 4 「音楽教育研究」 70 音楽の友社 1972年

(平成14年3月30日受理)